

Y3-39

看護部、薬剤部、医療安全推進課が連携して行う薬剤関連業務の改善（第二報）

横浜市立みなと赤十字病院 薬剤部¹⁾、
横浜市立みなと赤十字病院 看護部²⁾、
横浜市立みなと赤十字病院 医療安全推進課³⁾

○井口 恵美子¹⁾、宮内 まゆみ²⁾、角藤 厚美²⁾、
山口 静²⁾、澤山 幸恵²⁾、三上 久美子³⁾、
高橋 弘充¹⁾

【はじめに】新規業務を導入するにあたり、ワーキンググループを構成し、検討することはよくとられる形態である。当院には開院当初より、安全かつ標準化された薬剤関連業務の遂行を目的として作られた薬剤検討チームがある。看護部、薬剤部、医療安全推進課の代表メンバーより構成され、薬剤に関わるさまざまな問題について解決をはかっている。今回この活動の中から、標準化された簡易懸濁法を導入した事例を取り上げ、チームの活動について紹介したい。

【方法】今回簡易懸濁法を導入するにあたり、当初、神経内科病棟のみで展開する予定であったが、院内全体へ急速に拡大する傾向にあったため、この薬剤検討チームから発信された各病棟へのアンケートによる情報収集、当院の看護業務に則した簡易懸濁法マニュアルの作成の検討、各現場での簡易懸濁法学習会の開催を行い、院内での統一を行った。

【考察】多くは薬剤部からの一方的なマニュアル提示、情報提供にとどまることになりがちであるが、このチームを通じて検討することにより、実際行うスタッフの目線での検討がなされた形で情報発信することができ、院内での統一が効率よくなされたと考える。現在も簡易懸濁法だけでなく、薬剤師の病棟常駐業務の標準化、一歩進んだ持参薬の運用等の検討もこのチームを通じておこなっている。今後はさらにこのチームの活動を活発化し、安全な薬剤業務を遂行していきたい。

Y4-17

電子カルテ導入に伴うクリパス作成の小児特有の問題点

名古屋第二赤十字病院 小児病棟

○梅田 美加、吉永 良子、太田 有美、谷内 結花、
関塚 美穂、吉田 弘樹、側島 健宏、神田 康司、
岩佐 充二

小児科は、0歳から15歳までの全科の疾患を持つ幅広い層の患者が対象である。それぞれの対象に合わせたクリカルパスを作成すると膨大な数となり、使用において非効率となる。しかし、業務の効率化、治療の質の均一化を図り、看護の質を向上させるためには、クリカルパスの導入は必須である。当院小児科病棟ではクリカルパスを作成し始めた平成15年より、小児科特有の疾患、入院頻度が高い疾患を厳選してクリカルパスを作成し、試行錯誤を繰り返した。現在、気道感染・腸炎・喘息・川崎病・ヘルニア根治術・アデノイド扁桃切除術、虫垂炎（手術・保存）などの12種類のクリカルパスを活用している。

当院では、平成22年5月1日より電子カルテが導入されることとなった。当初クリカルパスについては、従来のクリカルパスそのままの形で使用するつもりでいたが、電子カルテのプログラムの制約上、従来のままの形でクリカルパスを移行することはできなかった。その結果、医師がその都度指示を出さなければならず、看護師の指示確認作業にも時間がかかり、本来のクリカルパスのメリットである治療の均一化や業務の効率化が図れなくなっている。当病棟では、医師・薬剤師・看護師からなるクリカルパス担当者を中心に、こうした電子カルテ上でクリカルパスを使用する過程において生じてくる様々な問題に対し、その都度、協力して問題解決に向けて検討し、改善に向けて対策を講じている。今回、その経過をまとめ報告する。

Y4-18

電子カルテ移行後のクリティカルパスのバリエーション評価に関する結果及び考察

名古屋第一赤十字病院 看護部

○山下 絵美子、岡田 朋子、井内 豊子、中川 梨沙、
浜瀬 夏子、下村 礼子、磯部 有希、松尾 多映、
後藤 満江、山崎 明美

当院は名古屋西部に位置し、地域医療支援病院として852床を有しており、急性期医療の中核病院の役割を果たしている。その中で心臓血管外科は年間300例以上の心臓大血管手術を実施している。心臓血管外科のクリティカルパスは、冠動脈バイパス手術と弁膜症手術に使用しており、クリティカルパスを使用し始めて約10年になる。当院は2009年1月より電子カルテを導入し、それに伴い、電子カルテ上では2010年5月よりクリティカルパスの使用を開始した。電子カルテへ移行する際は、アウトカムを詳細に設定し直し、それに合わせ内容を改定した。また、紙ベースの時にはクリティカルパスから逸脱したか否かしか評価できなかったが、電子カルテに移行してからは、アウトカムごとに評価できるようになった。今回、電子カルテに移行する際の工夫点と、バリエーション評価の結果・考察を発表する。

Y4-19

岡山市内統一冠動脈疾患（心臓リハビリテーション）冊子の作成と運用

岡山赤十字病院 リハビリテーション科¹⁾、
岡山赤十字病院 整形外科²⁾、岡山赤十字病院 循環器科³⁾
○小幡 賢吾¹⁾、中尾 亮介¹⁾、片岡 昌樹¹⁾、
小西池 泰三^{1,2)}、斎藤 博則³⁾、氏平 徹³⁾

岡山市内では昨年4月より、急性心筋梗塞地域連携クリティカルパスの前段階として、岡山市内で心臓リハビリテーションを行っている急性期病院を中心に、各職種が集まり冠動脈疾患に対する市内統一冊子（以下、冊子）の作成を開始した。冊子は昨年9月より運用を開始している。冊子の内容として、前半は冠動脈疾患で入院した患者の生活指導を、後半は患者自身が退院後、自己管理・運動状況を書き込むようになっており、これを掛かり付け医が確認できるようになっている。また急性期病院で定期受診の際にもこの冊子を持参し、退院後の状況を確認することにも用いる予定である。冊子内での各項目の指導方法・指導する職種は特に統一されおらず、各病院の状況に応じ行われている。当院では各項目を医師・看護師・理学療法士・管理栄養士・薬剤師・臨床心理士が指導している。今回、本冊子の紹介ならびに冊子を使用した患者に行っているアンケート結果をもとに問題点と今後の課題を報告する。